

JICAガーナ 事務所ニュース

所長の一言

目次

所長の一言

1. 最近の動き

- 技術協力「現職教員研修運営管理強化プロジェクト」中間レビュー調査
- 有識者モニタリング
- 貧困農民支援 2KR
- 青年海外協力隊 OG、UNHCR/UNV で難民支援のために働く泉名朋子さん
- 公務員研修センター機能強化プロジェクトの開始

2. 健康管理便り

3. ボランティア便り

- 平成20年度4次隊&平成21年度1次隊現職教員JOCV 帰国コメント

4. 広報/NGO-JICA ジャパンデスクから

3月11日に発生した東日本大震災でお亡くなりになられた方に哀悼の意を表しますとともに、被災された皆様に、心よりお見舞い申し上げます。

日本では国を挙げて被災された方の支援と復興への取り組みが行なわれています。また、アメリカやヨーロッパの国々だけでなくアジア、中近東、アフリカなど世界各国からの救助隊の派遣や義援金の申し出などの支援を受けているのはご案内のとおりです。

JICAも震源に一番近いJICA東北は幸いに業務をすぐ再開することができました。福島県にあるJICA二本松は現在400名近い被災者の方を受け入れているとともに、JICA東京も被災地の医療機関の患者さんを70名以上受け入れています。

また、JICAは今まで海外での災害支援の経験を生かして国連災害評価調整(UNDAC)チームや国連人道問題調整事務所(UNOCHA)の日本での活動を支援しています。

今回の災害に際して、数多くのガーナの方々からお悔やみとお見舞いの言葉をJICA事務所に頂いております。JICAが実施している協力が多くのガーナの皆さんに支えられていることを改めて感謝するとともに、頂いた励ましの言葉に答えるべく事務所員一同努力していきます。

最後になりますが、JICAガーナ事務所で関係者の皆さんにお声かけをして募った義援金を23日にJICA本部の窓口へ送金をいたしました。頂いた義援金は岩手県、宮城県、福島県と国際協力NGOセンター(JANIC)を通じて被災者の方への支援に活用されることとなっております。改めまして、ご協力を頂いたことに御礼申し上げます。

1. 最近の動き

技術協力「現職教員研修運営管理能力強化プロジェクト」 中間レビュー調査

ガーナでは、初等教育における総就学率は9割強に達していますが、教育の質については多くの課題があり、特に公立学校の教員の指導力の低さが課題となっています。その改善のため、JICAは体系的な現職教員研修(INSET: IN-Service Training)制度の構築に向け、2000年から継続的な支援を行っており、その成果を受け、ガーナ国政府はINSET全国展開プログラムを2008年に策定しました。JICAは技



校内研修風景(模擬授業)

術協力プロジェクト「現職教員研修運営管理能力強化プロジェクト」(2009-2013)を通じ、同プログラムの円滑な実施を支援しており、今般、2月17日から3月10日にかけて、中間レビュー調査を行いました。



校内研修で実験方法・教材作成
を学ぶ教員

今回調査では、カウンターパートである国家 INSET ユニット (NIU: ガーナ教育サービス教師教育局内に設置) メンバーとともに、プロジェクトの進捗・目標達成状況の確認を行い、今後の方向性に関する協議を行いました。

プロジェクトでは、校内研修 (SBI) / クラスター研修 (CBI)¹ を主軸とした INSET モデルを全国へ導入・運営するために、国家・州・郡・学校の各レベルにおいて INSET 実施のための運営管理能力及び技術的な指導力の強化を支援しています。開始当初の計画では、2009 年に 57 郡、2010 年に 71 郡で全国 138 郡 (前フェーズでのパイロット 10 郡を含む) を対象に INSET を順次拡大する予定でしたが、急速な地方分権化により大部分の INSET 関連予算が中央から郡教育事務所へ移管され、また、郡の分割に

より対象郡が 170 郡に増加したため、これまで中央でコントロールしていたように必要な予算をタイムリーに確保・拠出することが困難になったため、学校レベルで SBI/CBI を実施するための前提となる郡教育関係者及び各学校の校長、教務主任を対象とした研修の実施が計画より遅れています。

このような状況下において、NIU メンバーも出張予算に限られる中、電話を活用し、各郡に対して INSET 関連研修予算の確保及び研修実施のファシリテーションに努める等、専門家チームとともに状況に応じた臨機応変な対応に尽力し、プロジェクト目標及び成果の一定程度の達成に貢献していることが、今回調査により確認されました。

調査結果を踏まえ、調査団は、(1) NIU の郡へのファシリテーション能力・調整能力の強化、(2) 各郡所属の指導主事の学校レベルでのモニタリングへの活用、(3) SBI/CBI の質を左右する各学校の教務主任の能力強化、(4) SBI/CBI 実施のための校長のリーダーシップの強化、(5) 質の高い SBI/CBI 実施校の経験をニュースレター等を通じ全国に共有する等、複数の提言を挙げました。更に、プロジェクトを取り巻く環境の変化に対応するために、プロジェクトのデザインについてカウンターパートと協議を行い、新たに追加・整理すべき活動を精査するとともに、プロジェクト目標及び成果に関し、適正な指標を設定しました。



郡教員支援チームへのインタビュー

地方分権化の急速な進展により、当初計画に影響が生じ大きなチャレンジとなっていますが、一方で今後各郡への啓発活動が順調に進み、各郡で INSET 実施予算を確保し、各郡の人材を最大限に活用し INSET を実施していくことができれば、各郡のオーナーシップが向上することにつながると考えられます。プロジェクト終了後の自立発展性という観点からは、地方分権化の流れはチャンスと捉えることもできますと言えます。残りのプロジェクト期間では、提言で掲げられた事項への対処等、プロジェクトの取り組みに対し、事務所からも一層の支援を行っていきたいと思います。

(ガーナ事務所 西畑所員)

本プロジェクトの詳細はこちら。<http://www.jica.go.jp/project/ghana/001/index.html>

有識者モニタリング

2月28日から3月4日にかけて、JICA 本部の評価部による有識者モニタリングが行われました。評価有識者モニタリングとは、ODA 事業の理解が深い方に現地を視察してもらい、「一般国民の視点で現場の事業を視察し、その結果を国民にフィードバックする」ことを目的にして実施されるものです。今回、評価有識者として

¹ クラスター研修とは、近隣の学校数校に属する教員が会場となる一つの学校に集まり研修を行うこと。

NGO より CSO ネットワークの黒田かをりさんがガーナを訪問し、評価部からは上條次長が同行されました。現地日程はとてもタイトで、技術協力案件（天水稲作持続的開発プロジェクト、野口記念医学研究所感染症対策プロジェクト、技術教育制度化支援プロジェクト）、無償資金協力案件（国道 8 号線改修計画）、有償資金協力案件（幹線道路改修）、青年海外協力隊活動（クマシ、ケーブコースト）の視察、並びに帰国研修員との懇談と、JICA の全スキームを網羅した内容になりましたが、調査団はどの訪問先でも熱心に質問され、現場関係者の声に耳を傾けられていました。最終日の事務所報告では、日本の協力に対するガーナ側からの評価について、「基本的にポジティブな印象を受けた」とされ、「JICA の長年の協力が評価されているのでは」とお話されていました。

特に、ケーブコースト技術学校の井上隊員（自動車整備）の活動する学校付属の修理工場が、今年 9 月にトヨタガーナの認定工場となることについて、「彼が（トヨタに繋がる）国際基準の技術を我が校に持ってきてくれた」という学長の高い評価に感銘を受け、「こうした活動が広く日本でも知られるようにすべきでは」と感想を述べられていました。黒田さんの評価報告は、纏まり次第、JICA の HP で確認できるようになる予定です。（ガーナ事務所 松澤所員）

貧困農民支援 2KR

皆さんは「貧困農民支援（Grant Assistance for Underprivileged Farmers）」という JICA の支援をご存知でしょうか。通称 2KR とも呼ばれますが、小・中規模の農民や農民組織に対する、食糧増産のための農業資機材の支援です。具体的には、日本政府がガーナ政府に対してトラクター、脱穀機、精米機、灌漑用ポンプ等の農業資機材を供与し、ガーナ政府食糧農業省（MOFA）が農民に対しその資機材を市価よりも廉価で販売するものです。



コンバイン操作方法について
熱心に学ぶ MOFA 職員

日本政府は 2005 年度、2007 年度、2009 年度とこの支援をガーナ政府に対して行ってきましたが、このたび 2009 年署名分の農業資機材がガーナに届き、農民への販売を前にして MOFA 農業機械サービス局のエンジニアを対象に各種資機材の使用にかかるトレーニングが行われました。

ガーナ政府は機械化による農業の近代化を推進するものの、農業機械の技術者が不足しており、農業機械自体の導入とともに技術者の育成が急務となっています。農業機械が持続的に使用されるには、日々のメンテナンスや故障時の的確な修理が重要であり、その中核を担う MOFA の技術者はまさにガーナ農業近代化の最重要アクターといえます。

今回は日本の農業機械メーカーから派遣された 2 名のスタッフが講師となり、ワークショップと実際の稲の圃場の 2 箇所ですトレーニングを行いました。参加者は新しいコンバインハーベスターや刈取り機を前に真剣そのものです。日本と比べて均平が取れていないデコボコの圃場でスタックする等のハプニングもありましたが、参加者からの評価は非常に高いものでした。



刈取り機を操作する MOFA 職員

今回支援された農業資機材は稲作に関連する農業資機材で、北部 3 州、ボルタ州、グレーターアクラ州、アシャンティ州の 6 州において今後小・中規模の農民や農民組織に対して販売されることとなります。ガーナ政府が国産米振興を進める中、今後の彼らの活躍に大きな期待がかかっています。

（ガーナ事務所 加藤企画調査員）

青年海外協力隊OG、UNHCR/UNVで難民支援のために働く泉名^{せんみょう}朋子さん



UNHCR 泉名さん

泉名さんは、2009年8月より国際連合難民高等弁務官リベリア事務所（United Nations High Commissioner for Refugees）へ国連ボランティアとして参加し、現在はProtection Officerとしてリベリアでの平和構築支援、難民の緊急支援を行っています。

2004年－2006年度には青年海外協力隊（以下、協力隊）村落開発普及員としてエルサルバドルにて活躍された泉名さん。紛争後の活動地での協力隊の経験を通して、平和構築分野の重要性を知り、協力隊終了後は大学院で平和学を学び、現職へと至りました。

赴任当初は、リベリアや隣国の情勢安定に伴い難民の規模が収縮していく中、難民支援機関のフェーズアウト期における「難民の生活自立支援」事業を行ってきました。しかし、昨年よりの隣国コートジボアールの情勢悪化に伴い、同国からリベリアへの難民が急増、現在は日々刻々と変わる政治情勢を睨みながら、コートジボアール難民支援活動に従事しています。リベリアの政治的意図や国際社会の思惑が錯綜する現在のリベリアで「難民支援の様々な側面が見ることができる良い機会である」と冷静に現状を受けとめているのが印象的でした。

現在の職場での仕事の中で2年間の協力隊活動で培ったあらゆる経験と達成感が生かされていると振り返る泉名さん。そんな泉名さんから現役協力隊の皆さんへの温かいエールです。「協力隊での生活、活動の中では多くの困難があると思いますが、日々の活動を大切にこなしていけば、それが必ず次に繋がっていくのではないのでしょうか」

（リベリア・フィールドオフィス 前川在外専門調整員）

公務員研修センター機能強化プロジェクトの開始

3月、技術協力プロジェクト「公務員研修センター機能強化プロジェクト」の専門家チームが到着し、活動が本格的にはじまりました。協力期間は3年間、カウンターパートは公務員研修センター（CSTC）とその監督機関、ガーナ人事委員会（OHCS）です。



公共サービスの質・効率向上には、政府事業の実施で中核的役割を担う中堅公務員の能力強化がかかせません。この中堅公務員を対象とした研修実施機関がCSTCですが、かつては十分な研修提供能力がなく、リーダーシップや公務員倫理、生産性向上など公務員全般にニーズの高い分野にも研修を提供することができていませんでした。2007～2010年にJICAが協力した「公務員能力強化プロジェクト」では、中堅公務員向けの短期研修コース（「倫理リーダーシップ（EL）」と「質・生産性向上（QPI）」）の開発・実施をつうじてOHCS/CSTCの組織能力向上を支援し、研修コースや講師の大幅増加、研修評価サイクルの確立など大きな成果をうみました。協力期間中には、隣国リベリア、シエラレオネからも研修員が招かれ、好評を博しました。

こうして研修運営能力を強化したOHCS/CSTCですが、研修実施機関として自立し、彼らが目標とする「公務員研修におけるCenter of Excellence（CoE）」となるには、講師の研修提供能力向上、研修評価システムの定着、研修カリキュラム・教材の作成／レビュー能力の強化など、さらに組織運営能力の強化が必要です。また、先に研修員を派遣したシエラレオネとリベリアからは研修参加の継続希望が寄せられており、内戦後の人材不足に直面する両国に対する域内貢献が期待されます。域内協力の担い手となることは、ガーナ側自身の能力強化にも有効です。

新プロジェクトでは、これらの点をふまえ、CSTCが公務員研修のCoEにふさわしい質と機能を備えることを



目標として、3 カ国間の域内協力を軸とした支援を行います。具体的には、GSTC がシエラレオネとリベリアの研修員を対象に研修コースを企画・実施運営できるよう、一連のサイクル（研修ニーズ調査→研修カリキュラム策定・教材開発→両国向け講義形態への改良→研修実施→研修成果定着のためのモニタリング評価）への取りくみを支援します。これによって、GSTC が将来的に、新規ニーズに応じて質の高い研修を提供できるようになるための能力向上をめざします。

プロジェクトでは早速、第1回合同調整委員会（JCC）やワークショップが開催されるなど、専門家チーム3名の活躍と OHCS/GSTC の圧倒的なオーナーシップのもとで、躍動感ある展開がつづいています。4 月には、

OHCS/GSTC スタッフと専門家チームがシエラレオネとリベリアを訪問して事前調査を行い、その後の研修ニーズ調査につなげていく予定です。

本プロジェクトをつうじて、OHCS/GSTC が援助の「受け手」から「担い手」へと成長すること。それが私たちの願いです。

（ガーナ事務所 織田企画調査員）

2. 健康管理便り

新参者の私は、毎日「暑いなあ！」と感じるのですが、皆さんいかがですか？さて、私からの「健管便り」第1号は、今流行しているコレラのお話です。

現在、全国で報告されているコレラの患者数は、3月17日現在で、4009人（内死亡61人）。そのうち3140人（内死亡32）がアクラでの患者だそうです。主に、貧しい人々の住む地域で発生しています。これから雨季のシーズンに入ると、ますます流行が拡大したり、一旦流行が終息傾向にあったとしても再燃したりする事が懸念されます。

コレラは、患者の便に含まれているコレラ菌が、水や食物、あるいは感染している人の手を介して、他の人の口から入って感染しどんどん広がって生きます。ですから、我々にとって感染予防は簡単で「火が通っていないものは、口にしない」「手洗いをする」ことを徹底することです。

コレラのワクチンもありますが、2回接種で有効期間6ヶ月。しかも、予防効果が低いことから、接種はあまり推奨されなくなりました。

コレラで発熱を伴うことは少ないのですが、頻回で多量の水様性の下痢や嘔吐のために、数時間のうちに急激にひどい脱水状態に陥り、死ぬこともある病気です。でも、適切な治療（抗生物質とORSや点滴）がすばやく受けられれば、回復も早い病気です。

コレラ菌は、健康な人の口から進入しても胃酸の影響でほとんどが死滅し、感染は成立しにくいと言われていいます。しかし、胃が弱くて薬が欠かせないような人は、薬で胃酸が弱まっていて感染しやすくなっていますので特に注意が必要です。

Boil it, Cook it, Peel it or forget it!

（ガーナ事務所 井上健康管理員）



3. ボランティア便り

平成 20 年度 4 次隊&平成 21 年度 1 次隊現職教員 JOCV 帰国コメント

<Q1. ボランティア氏名(カナ) Q2. 派遣職種/任地 Q3. 2年間で変わった?コト Q4. 最後に一言! >

Q1. 林 朝子(ハヤシ アサコ)
Q2. エイズ対策/ムパラエソ
Q3. こどもと遊べるようになった事
Q4. 幸せは自分自身でもたらずもの。→最近ガーナ人から聞いた言葉です。これを皆が実現できるガーナになりますように!

Q1. 宮本 武蔵(ミヤモト タケクラ)
Q2. プログラムオフィサー/ワ
Q3. 手を抜くところを覚えた。
Q4. やっぱアフリカの生活は難儀っすね。



Q1. 中村 郁予(ナカム ライクヨ)
Q2. 小学校教諭/ドドワ
Q3. 明らかに黒くなった・・・。
そして髪が伸びた。
Q4. 皆さま、色々とお世話になりました。2年以内にガーナに再び足を踏み入れたいです。

Q1. 刀根 史(トネ フヒト)
Q2. Statistics/Cape Coast
Q3. 焦げた。

Q1 森田 麻由(モリタ アユ)
Q2. 青少年活動/アキム・スウェドル



Q1. 青木 哲平(アオキ テッペイ)
Q2. 理数科教師/アヴェ・ダクバ
Q3. テキトーになった。黒さ。
Q4. JOCV の皆さん、ガーナを楽しんでください!!

Q1. 尾駒 亜紀(オコマ アキ)
Q2. 村落開発普及員/ホホエ

Q1. 川本 真紀(カワモト マキ)
Q2. プログラムオフィサー/アクラ

Q1. 愛甲彩(エフィアサポン)
Q2. 青少年活動/クマシ
Q3. 動物的感覚が研ぎ澄まされました?
Q4. お世話になりました。Medase paa!!

Q1. 東明 美和(シノアキ ミワ)
Q2. 感染症対策/ンカウィエ
Q3. 一度も切らなかったので髪が伸びました。
Q4. ガーナありがとう。

Q1. 丸地 由美(マルチ ヨシミ)
Q2. 行政サービス/アゴナ・ンクワンタ
Q3. 体重
Q4. 事務所の皆さん、隊員の皆さんにお世話になり、2年間を終えることができます。ありがとうございました。任期のある隊員の皆さんは、充実したガーナライフを楽しんでください。



Q1. 吉澤 初美(ヨシザワ ハツミ)
Q2. PCインストラクター/ジュクワ
Q3. いろいろ気にしなくなった。
Q4. ガーナを好きになって帰ってください!

Q1. 今泉 智子(イマイズミ トシコ)
Q2. PCインストラクター/タコラディ
Q3. ガーナで、20代から30代になりました。
Q4. 2年間、せっかくなのでどんな状況も楽しんでください。

Q1. 村上 佳代(ムラカミ カヨ)
Q2. 保健師/アゴナ・スエドル
Q3. 黒くなった。
Q4. さようなら。
ありがとうございました。

Q1. 松山 豊治(マツヤマ トヨハル)
Q2. 感染症対策/マンソ・ウクワンタ
Q3. 皮フ
Q4. ありがとうございました。皆様。



- Q1. 坂東 舞 (アベナ)
- Q2. 感染症対策/ンサワン
- Q3. 大阪のおばちゃんに近づきました (><)
- Q4. 神の御加護を! アーメン!



- Q1. 岸本 嘉奈子 (キシモト カナコ)
- Q2. 小学校教諭/アクロポン
- Q3. ずうずうしくなった!
- Q4. 怒り、泣き、笑い、怒り、そしてまた笑い…
とっても濃い 2 年間でした。ガーナ人、日本人、
支えてくれたみなさんに感謝です! ありがとうございます

- Q1. 石田 奈帆美 (イシダ ナオミ)
- Q2. 村落開発普及員/スンヤニ
- Q3. 誰にでも挨拶するようになった
- Q4. また近いうちにガーナに遊び
に戻ってきます!!

- Q1. 阿部 克俊 (アベ カツシ)
- Q2. 青少年活動/マンケシム
- Q3. 太って、黒くなった
- Q4. 楽しかったです

- Q1. 漆畑 成顕 (うるしばた ひ
であき)
- Q2. 木工/エジス
- Q3. 染みと皺の数
- Q4. 夢のような 2 年間でした!!
まるでディズニーランド!!



- Q1. 本田 美希子 (ホンダ ミキコ)
- Q2. 小学校教諭/アクロポン
- Q3. なんでも HAPPY☆と思えること
- Q4. ガーナが好きになれない時期
もあったけど、“ガーナ! いいかも!”
と今、思えることがちょっと
嬉しいです♪

- Q1. 吉村 恵侑 (ヨシムラ ヤス
ユキ)
- Q2. 村落開発普及員/コフォリ
デュア
- Q3. 考え方。視野の広さ。
- Q4. 2 年間無事、元気に活動す
ることができました。ありがと
うございました。

- Q1. 田中 みづほ (タナカ ミヅホ)
- Q2. 小学校教諭/ワ
- Q3. イスラム教への意識
- Q4. 楽しい 1 年 9 カ月でした。み
なさん、お元気で。

- Q1. 古川 彰 (フルカワ アキラ)
- Q2. PCインストラクター/ワ
- Q3. これまでの価値観と、『自分は自分らしく』
ということを再認識
できたと思う。

- Q1. 森 昭子 (モリ ショウコ)
- Q2. 村落開発普及員/スンヤニ

- Q4. 無理をして体調を崩すことが多
かったですが、ガーナでは無理は
禁物、疲れたら座りましょう。
悩みがあるならたくさん食って
飲んで寝ちゃいましょう。1 年 9
ヶ月の間、色々とお世話になり
ました!



帰国時の表敬訪問 Ministry of Finance and Economic Planning にて

JICA ボランティア事業についてはこちら。<http://www.jica.go.jp/volunteer/index.html>

4. 広報/NGO-JICAジャパンデスクから

3月11日東北地方太平洋沖地震が発生しましたが、ガーナでも昨年洪水被害が発生し JICA が緊急援助物資の供与を行いました。そのモニタリング調査として、先日ノーザン州へ出張に行ってきました。限られた時間の中でノーザン州の州都であるタマレと、タマレから車で約2時間ほど離れたカルガに向かいました。ガーナの地方では現在でも昔ながらの伝統が強く残っており、中央政府よりもコミュニティーリーダーの影響力が大きい場合があります。今回カルガで調査を行った際にも円滑な調査推進のため、まずコミュニティーリーダーに挨拶に行き、調査が終わったことも報告に行きました。物資の供与は地域住民に感謝されており、コミュニティーを出る際にはガーナの北部で食べられるホロホロ鳥をプレゼントされました。



ホロホロ鳥と福原所員

ここで私が強く感じたのは、ガーナという同じ国に属していながら、都市部に住む人々と地方に住む人々の間では様々な面で大きな違いがあるということです。経済格差、情報格差、健康格差、医療格差、教育格差、一般的には地方に住み、伝統的な生活をする人々は様々な面で不自由があり、貧しいと思われがちです。確かに都市と地方で貧富の差があることは事実で、人々の生活をもっと近代化させれば、きっと便利で豊かな生活を送ることが可能です。しかし、それは先進国に住む人々のひとつの見方であり、もっといえば欧米社会の文化を取り入れることが豊かであるということでもあります。このあたりの議論は Modernization Theory や Dependency Theory で行なわれています。恐らく実際にコミュニティーで生活をしている協力隊員の方々の中には、彼らの生活が絶対的に貧しいという解釈に違和感を持つ方も多いのではないのでしょうか。それは私たちの目に見える違いが、格差ではなく文化の違い、価値観の違いに基づくものだからかもしれません。以上のようなことを踏まえて事業のデザインや支援の仕方を考えていくと、より現地の人々に受け入れられやすい援助となるのではないのでしょうか。

(広報/NGO-JICA ジャパンデスク 宮浦)

緊急援助ニュースについてはこちら。<http://www.jica.go.jp/information/jdrt/2010/index.html>

事務所ニュースは JICA Ghana ホームページでも掲載中です。
<http://www.jica.go.jp/ghana/office/others/newsletter/index.html>